27

氏　　名　丸山聡子（マルヤマ ナトコ）
学位の種類　博士（医学）
学位授与の番号　乙第2597号
学位授与の日付　平成21年10月16日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目　**Factors associated with glycemic control after an inpatient program**
（教育入院プログラム後の血糖コントロールに関与する因子）
主論文公表誌　Metabolism　第58巻　第6号　843-847頁　2009年
論文審査委員　（主査）教授　岩本　安彦
（副査）教授　山口　直人，大和　雅之

論文内容の要旨

〔目的〕

血糖コントロールを目的で入院した糖尿病患者において，退院後のHbAlcの改善度に関与する背景因子についてデータベースを用いて解析した．

〔対象および方法〕

1999年4月～2003年5月の間に入院し．HbAlc 8%以上かつ退院後6ヵ月以上通院した2型糖尿病患者605名をデータベースより抽出した．主解析として，入院6ヵ月後にHbAlc 7%未満が達成できなかったことに関与する因子をステップワイズlogistic regression modelを用いて検討した．また，副解析として，入院6ヵ月後のHbAlcが入院時と比較して1.5%未満の低下であることに関与する因子についても同様の検討を行った．

〔結果〕

対象患者605名のうち，入院6ヵ月後にHbAlc 7%未満が達成できなかった者は409名であった．主解析では，糖尿病診断確定から入院までの期間（オッズ比（OR）2.43；95%信頼区間（CI）1.54-3.82，$p<0.001$），初診から入院までの期間（OR 1.60；95%CI 1.01-2.54，$p=0.047$）および入院回数（OR 2.28；95%CI 1.36-3.82, $p=0.002$）が，入院6ヵ月後にHbAlc 7%未満が達成できないことに関与する因子であった．副解析では，診断確定から入院までの期間（OR 2.17；95%CI 1.19-3.93，$p=0.011$），初診から入院までの期間（OR 2.17；95%CI 1.43-3.29, $p<0.001$），退院時治療（経口血糖降下薬OR 2.52；95%CI 1.15-5.51, $p=0.021$, インスリン　OR 4.44；95%CI 1.96-10.07，$p<0.001$），入院時HbAlc（OR 0.44；95%CI 0.37-0.53，$p<0.001$）および退院後の処方の追加（OR 0.41；95%CI 0.27-0.62, $p<0.001$）が，入院6ヵ月後HbAlcが入院時と比較して1.5%未満の低下であることに関与する因子であった．

〔考察〕

糖尿病は進行性の経過をたどりやすい疾患であり，診断確定から入院までの期間が血糖コントロールの改善と関与していたのは理解しやすい．

2回目以上の入院であることや初診から入院までの期間が長いことは，治療意欲の低さと関係している可能性が考えられる．

処方の追加により血糖は有意に改善するものの，必ずしも良好な血糖コントロールには至らないことが示された．

入院後の血糖コントロールに関与する患者背景因子を検討した報告は他にはない．血糖コントロール目的の入院は，日本ではよく行われるが，諸外国では保険適応の関係で，あまり行われていないからである．しかし，厳密な食事療法下において最も適切な治療を選択できるという意味で，教育入院は非常に有用である．どのような患者が血糖コントロールが改善しにくいのかが予測できれば，よりよい入院プログラムの開発に有用であると考えられる．

〔結論〕

血糖コントロールを主目的に入院した患者において，6ヵ月後 HbAlc 7% 未満が達成できないことに関与する因子は，入院が2回目以上であること，診断確定から入院，または初診から入院までの期間が長いことであった．糖尿病自体の自然経過および患者の治療意欲の関与が考えられる．

論 文 審 査 の 要 旨

糖尿病の治療において血糖コントロールを目的とした教育入院プログラムは有用であるが，教育入院の効果が十分でない場合の要因についての検討は少ない．本研究では，血糖コントロールを主目的として入院した2型糖尿病患者の入院6ヵ月後の HbAlc の目標値の未達に関与する因子を検討した．その結果，入院が2回目以上であること，診断確定から入院まで，または初診から入院までの期間が長いことが因子として抽出された．これらの結果は，患者の治療意欲を高めることと，早期治療（入院）の重要性を示したもので，臨床的に意欲のある論文である．

28

氏　　名	西巻桃子（ニシマキ モモコ）
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第2598号
学位授与の日付	平成21年10月16日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**Clinical characteristics of frequently recurring painless thyroiditis: Contributions of higher thyroid hormone levels, younger onset, male gender, presence of thyroid autoantibody and absence of goiter to repeated recurrence** **（無痛性甲状腺炎の頻回再発に対する血中甲状腺ホルモン，発症年齢，性，甲状腺自己抗体，甲状腺容積の影響）**
主論文公表誌	Endocrine Journal　第56巻　第3号　391-397頁　2009年
論文審査委員	（主査）教授　髙野加寿恵 （副査）教授　岩本　安彦，田邉　一成

論 文 内 容 の 要 旨

〔目的〕

無痛性甲状腺炎は甲状腺組織の崩壊により生じる一過性の甲状腺中毒症であり，妊娠，分娩，糖質ステロイド薬中止などが誘因となる．しかし，誘因がなく頻回に再発する症例が存在し臨床的に問題となる．今回，誘因なく頻回に再発した症例について調査し，頻回再発の病態について検討した．

〔対象および方法〕

特に誘因がなく甲状腺中毒症を4回以上発症した無痛性甲状腺炎患者8名を対象とした．また，中毒症が3回以下であった40名をコントロール群として臨床所見と検査所見を統計学的に比較検討した．

〔結果〕

対象群患者8名では甲状腺中毒症の発症は7回が1名，5回が1名，4回が6名であった．コントロール患者40名では3回が4名，2回が4名で1回が32名であった．対象群患者は男性5名，女性3名であり，コントロール群（男性8名，女性32名）に比較して男性が有意に多かった．発症年齢は16～61（中央値32.5）歳でコントロール群の24～84（中央値40.5）歳と比較して有意に低かった．また経過中の遊離サイロサイロキシン（FT4）および遊離トリヨードサイロニン(FT3)の最高値も4回以上の頻回再発群で有意に高かった．性別，甲状腺腫の大き